

7.1 医療と健康増進

21世紀という新時代のスタート・不況下の新たな価値観の模索，健康志向の高まり - など背景に，「海」を医療や健康増進に生かそうという試みが広がっている。タラソテラピー施設の普及・医療機関の実践，さらには海洋深層水（以下，深層水）の活用などで，一定の研究成果が出ており，関心を呼んでいる。深層水を使った実践を知るにはまずタラソテラピーの概念を理解することが大切であるし，タラソテラピーは，ギリシャ語のthalassa（海）とフランス語のmeraple（治療）を合わせた造語でありフランスでは「漸進環境の中で，海水や海藻，海泥などを利用して，病気の治療・予防・健康増進に役立てるのが目的」と定義され，日本では「海洋療法」と訳されている。タラソテラピーの起源は，紀元前にさかのぼるギリシャの医学の祖ヒポクラテスが温海水療法を実践した記録がある。近代のタラソテラピーは19世紀末にフランスで始まり，ドイツやギリシャなど欧州各地に広まり・現在百ヶ所を越す施設ができ，市場も定着している。「夏に海水浴をすると，冬風邪をひかない」「海水につかると・切り傷や皮膚病，関節痛が治る」と，両者の効用は日本でも昔から認知されていた。全国各地に潮湯や塩湯浴，蘇風呂・海藻風呂などがある），みそぎや疲やしの際にもなっていた。日本にタラソテラピーの効用を論じたバイブルと思える著作が残されている。昇平で東京市長など務めた後藤新平が明治15年に著した「海水功用論」では「海水は淡水より効用がある」と表記され，婦人科領域の療法も詳しく論じられている。

タラソテラピーは主に水中運動やジェットバスなどの「水治療法」と海泥・海藻パックや大気浴などの「無水療法」に分けられ，メニューは多彩である。リウマチ・外傷，皮膚病，免疫異常・代謝異常，神経症，循環系障害など幅広い。